

即興メディア論序説

——大学授業のライブハウス化をめざして——

前 田 益 尚

1. 問題の所在

ミュージックシーンでは、CD（コピー）は売れなくなっても、ライブ（≡アウラ）の動員数は増えています。本論では、複製可能な電子情報より、生身を求めるライブハウスのニーズをヒントにして、大学教育のあるべき姿を模索します。

授業において、本を読めばわかる得られる《知識》の伝授が基軸となれば、学生がわざわざ登校するモチベーションは失われてゆきます。つまり、その日その場でしか体得できないライブの《知恵》比べを行う場こそが、教室の生き残る道だと著者は考えています。

すると、多くの大学が推進する授業のICT（情報通信技術）化は、現場のニーズに逆行する危機と見えてきます。本論は、情報機器とタブレット端末が学生に行き渡れば、大学も通信教育で済んでしまうという矛盾に警鐘を鳴らす試みなのです。

解決策として著者が考えるのは、教室のライブハウス化です。CDが売れなくなっても、ライブの動員数は増えている。それこそが、通信教育ではないキャンパスを湛^{たた}える大学の生き残る道ではないでしょうか。

著者はこれまで、教科書など使わず、連日メディアを賑わす社会問題をフリートークで分析するライブ授業を行って参りました。ライブで学生と対話しながら《思考実験》を繰り返す授業です。そしてこれこそが、若者の脳に、いまそこにある難問に対して、即興で解決策を導き出す思考回路を構築する教育法だと考えています。

一度でも、自転車に乗れる神経回路を身につければ、何年乗っていない

くても、すぐに乗りこなせるものです。大学のライブ授業で、問題解決の回路を脳に構築しておけば、卒業後も、逆境や苦難に遭遇した時、即興で解決策を導き出せる回路が稼働してくれるはずだと考えています。

結果、いま提言しておかなければならない大学における授業のあり方、その解決策《ライブ》を、思想の自由市場であるべき言論空間で世に問うという考えに至りました。スポンサーや監督官庁に縛られるメディアでは発信できない熱いメッセージです。

大学の授業に完成度を求めるなら、収録済みの放送大学やネット配信が安全でしょう。それに対して、完成度より、粗削りの極論で本質を突くのがライブ授業なのです。その教室は、勉強になった、ためになったという成果主義より、その場に居合わせたこと自体の《充実感》が優先される言論空間なのです。

なかなか活字では、一般論に冷や水をぶっかけるという意味の《異化効果》が発揮できないご時世、大学では、次世代に向けてライブ授業で語る意義はあります。

ヴァルター・ベンヤミンを援用するまでもなく、複製技術の発達で芸術作品の《アウラ》（いま、ここにしかない一回性）が消失している現在。生放送のテレビを超える肉声による本音をおちませるライブ表現は、権威を保つべき教育で唯一の《アウラ》体現手段になれるのかもしれない。但し教員も人間なので、複製技術を駆使して綺麗に編集できないライブでは、強調したい内容を何度も重複して話す授業もあるでしょう。著者の授業でも、先週と同じ内容があったと学生から指摘を受けることがあります。しかし、ライブハウスでは、同じ曲（話）でも、ヒット曲であれば待ってましたー！ と迎える聴衆が待っています。ならば、ヒット曲のように何度も聴きたくなるような講義内容を研くのが、ライブ教員の努めでしょう。

もちろん、やった事のないテーマ、やった事のない方法論で試行錯誤するのも、ライブ授業の醍醐味です。即興の授業は、ジャズの演奏や寄席に通じます。CDやDVDの完成度を求めるのではなく、マイナーチェンジの余裕があるからこそ、ライブ授業の真骨頂と言えるでしょう。

日本には昔から、《口伝くでん》という言葉が示すように、学問や技芸の奥義は、師が弟子に口で伝えて教え授けると言われて参りました。ライブ授業では、教員と学生の間に、電子的なメディアを挟むと得難い“阿吽あうん”

の呼吸”を図るのです。

学校では、「一人一台」の端末が与えられる、教育のICT化が推進される現在。CDは売れなくても、ライブのチケットは高額で転売されるご時世が証明するように、アーティスト、ライブパフォーマー、そして教員の放つ“熱量”は、相応に評価される時代です。また、いくら中継技術が発達しても、スポーツ観戦でスタジアムに駆けつけ、熱戦を体感する人間が減らないのも“熱量”を求める聴衆・観客ニーズの証左です。

そして、大学におけるライブ授業の環境は、商業ベースのエンターテインメントと違い、スポンサーの縛りが無い分、思想の自由市場だと言えるでしょう。

電子機器やタブレットの使用も、精神的に登校し辛い学生や物理的に多忙な社会人学生には、バリアフリーで有用です。しかし、情報機器と端末機器（デバイス）だけで成立する伝達の正確さだけを重視するのが大学の授業ならば、学生も教員も登校する必要はなくなります。オリジナルな創造性を担保するコール&レスポンス（阿吽^{あうん}の呼吸）のない授業は、作業や仕事に陥りやすく、効率を求める受験勉強までで終了したいものです。これまで記憶するのに費やしてきた時間とエネルギーを、大学では考えることに使いましょう。

そして大学では、ダウンロード（複製技術の駆使）の回数よりも、ライブの動員数を誇るアーティストのような、気迫のこもった授業が出来る教員こそが、生き残る時代が来ると著者は考えます。提起した問題に対する解決策のヒントは、次章以降に具体的な授業風景を開示します。

2. ライブハウスで行う思考実験

今日、この教室に来なければ、考えもしなかった事を考えるのが、大学の醍醐味でしょう。学部学生だった著者も、《知識》より、《知恵》を学ぶのが、大学だと期待していました。

しかし、いざ大学の教室に行ってみると、毎年毎年、同じノートを教員が板書していて、それを学生が書き写すという工場の流れ作業に近い授業が、絶望的な現実に見えました。板書と書き写しの繰り返しという二度手間、三度手間の非効率的で非文明的な変換作業に、これが学問の探究なのかと怒りが込み上げていたのを記憶しています。

それならば、教員のノートをコピーして事務部の窓口にでも積んでおけば、学生は都合のいい時に取りに来られるので、効率的且つ近代的な教育法だと思ったものです。そして、学部学生の時代にとったノートは、多くの学生にとって定期試験が終われば、二度と読み返されることがないのが実情でしょう。現在、授業中に、黒板をスマホで撮る学生の行為こそが、非合理的な板書と書記という前近代的な授業法に冷や水をぶっかける《異化効果》を発揮しており、次世代による《民衆理性》の発露だと見えます。

そして、2017年現在の教室。パワーポイントや情報機器の駆使が一見、板書と書き写しの非文明的な変換作業に対する突破口に思われました。しかしそれは、電子化された内容を放送大学やネットで配信することが可能だという事実を教室で証明しているに過ぎず、教室不要論という墓穴を掘る結果になります。そもそも、パワーポイントは電気紙芝居と揶揄されるようにプリントの方が受講者全員には見やすく、配布も随時すれば情報アクセスの利便性も担保出来るでしょう。

只、著者のライブ授業、その情報伝達には学生から思わぬ批判もあります。最小限には止めているものの、板書が汚い読みづらいという点です。しかし、音楽ライブのギター演奏に、譜面の忠実な再現が求められているのでしょうか。ライブでは、奏者がたとえ間違えたとしても、ギターをかき鳴らす臨場感が会場を熱くします。ですから、著者も黒板に殴り書きをして、汚い文字も臨場感だと言い張ります。キーワードだけでも、聴衆の脳に響いて、食い入るように読み取って欲しいからです。

そもそも時空を超える授業形態が可能なのに、なぜ、真夏のクソ暑い最中、真冬のクソ寒い最中、登校する必要があるのでしょうか。それでも教室授業が生き残るには、どうすれば良いのかを探究して参ります。

毎年毎年、同じ授業をやるのなら、その日その時間に、その教室へ行く意味がありません。さらに、教員は、学生が理解さえすれば満足してしまう傾向がありますが、それでは思考が進化しません。著者は、ニンテンドーDSのような電子機器で、記憶を中心とした受験勉強は賄えるまかなと考えています。しかしその先、最高学府では、記憶する時間とエネルギーを考えることに使って欲しいのです。だからこそ、大学における教室は、ライブハウスでなければ存在意義がないと考えています。そこは、問題を理解するだけでなく、ワンチャンスで問題を解決する回路を脳内

に形成させる場であって欲しいのです。それこそが、学生が社会に出る前のサバイバル教育だと著者は心得ています。著者は、ベンヤミンが、(いい意味で) 権威の抛り所だと断じた、いま、ここにしかない一回性としての《アウラ》が充満する教室を目指します。

著者が担当する『メディア論』を受講する学生たちに対して、質的調査を行った結果を例示します。著者は、講義に際して、この授業が他のメディアでは代替不可能な内容を目指す事を説明しています。そして、学生が納得出来た部分をレポートにしてもらい確認して、その結果は匿名を条件に公表する事も了解してもらっています。

問題：大学の教室授業において、情報機器やタブレット端末（IT：情報テクノロジー）が、必要でない理由を、列挙しなさい。

以下は、ITの浸透が(1) 授業のマンネリ化を引き起こし、(2) 不登校の危険性を助長するため、(3) 一期一会のライブ授業の意義が再認識され、(4) 情報機器の弊害が明確になれば、(5) 教室のライブハウス化を目指すという著者が《思考実験》するフローチャートに当てはまる回答の一例です。

(1) 「情報機器を使えば、どの先生が授業しても同じになり、果ては、先生がいなくても成立する。」(文化・歴史学科2年)

(2) 「情報機器やタブレット端末を導入するぐらいなら、終始、自宅学習の方が、効率的である。」(文化・歴史学科2年)

(3) 「なにが起こるかわからないから、授業に来ている。」(文化学科3年)

(4) 「口から出まかせでないと本音が聞けない。」(文学科1年)

(5) 「情報機器を使うと、教室の空気や、相手の空気が消される。」(文化・歴史学科2年)

その他、「授業用の高価な情報機器やタブレット端末を使わなくても、(学生) 皆が持っているスマートフォンで、なんでも出来る。」(文化・歴史学科4年)

最後の回答は、学生ならではの正鵠を射る問題提起です。情報端末はあっという間に古くなって、使い勝手が悪くなるという決定的な弱点がありますが、スマホで十分だと考えると、ほっておいても、学生が端末

となる携帯を買い換えてくれるのですから、文科省や大学が考える IT 予算は大幅に削減出来ます。

そして、学生の回答からは、情報機器やタブレット端末では教員も学生も総じて、アドリブを効かせにくいので、教室での授業には向いていないと主張している意見が回収されました。

本論の根拠となりえる声を拾い上げた学生への質的調査から浮かび上がって来た内容は、放送大学が生放送になっても不可能な“熱量”を有する教室授業のライブハウス化への要望と期待と受け取れます。

また放送大学は生放送にできても、客前でなければライブとは呼べません。客前は独特なライブハウス（言論空間）を演出します。客前なら、台本がなくとも、何かしゃべれるものです。そして、その何かが本音であり、本質を突く論理にするのが大学の授業のあるべき姿だと著者は考えます。

さらに、一部の学生が求めて体感する教室の“熱量”で考えると、学生がスマートに関わるアクティヴ・ラーニングという形式でも弱いはずです。良し悪しは別として、例えばファシリテーターが進行する議論は極論に至らず、音楽ライブのような熱狂からはほど遠い様相になるでしょう。だから、大学の授業では熱狂とまでは至らずとも、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授（以下、サンデル）が体現されている白熱教室のような様相が理想型（≒理想像）のひとつと言えるのです。それは勉強になった、ためになったという成績に表れる結果より、ひたすらその場の《充実感》が優先されるライブ現象なのです。

続いて、著者が教室で挑発または啓蒙し、学生が反応した、もしくは学生から質問され、著者が回答したというコール&レスポンスの様相を開示します。

サンデルは、白熱教室とラベリングされる自身の授業スタイルを、攻撃的なソクラテスの対話術とは違い、ラポールを紡いで学生と対話するべきだと説いています。まるで、ライブ会場における演者と客の信頼関係、コール&レスポンスのようによです。（『サンデル教授の対話術』2011. p.35. 参照）

そしてこの時間この教室に来なければ味わえない授業とは、どのような様相であると結論づけられるのでしょうか。議論の余地があるからこそライブであり、不確定だからこそ教室で検討する意義があります。放

送大学やネット授業にはない、その日その教室でしか出来ない《思考実験》を例に挙げて参りましょう。その結果、一般論に冷や水をぶっかける《異化効果》を体感できるはずです。

著者は、大きなハコ（キャパ100人以上）の講義でも、毎回ミニレポートで学生たちから問題提起してもらい、少なくとも翌回には、それに応える形式でオーダーメイド型の授業を展開して来ました。教室で展開しているのは、常に思考の反射神経が試されるライブ授業です。サンデルも、自身の経験から、抽象的な哲学書を読ませることは学生をおじけづかせるだけで、必ずしも意見の一致が見られなくとも、ソクラテス的な対話を重ねる授業こそが、困難な社会に立ち向かう市民としての素養を育む術だと説いています。（『サンデル教授の対話術』2011. p.37. 参照）

そこで著者はまず、板書もせず、マイク片手にフロアへ降りて練り歩きながら、言いつ放し聴き放しのオフレコ授業を行います。そこでは、決してメディアで語られない、載せられない、ものの見方や考え方を提示するのです。但し、人権を傷つける差別発言などは厳禁です。アンタッチャブルな政治的イシューが多くはありますが、メディアが勝手に自粛を決め込んだり、本質を見失って消化不良に陥った問題提起が主流です。

最終的には、メディアで取り沙汰される現代の社会問題、その解決策に正解はありません。次世代である学生たちの態度表明、意見表明、そして投票行動が政策を動かし、歴史的な決着を図るのです。大学とは、思想の自由市場です。いずれに転んでも、《思考実験》のプロセス、そして正解のない結果の開示になるでしょう。ライブ授業の目的のひとつは、正解を出すにあらず、どんな難題でも解決を導く思考回路を、脳内に構築する思考訓練なのです。

理系のクラスのように、その部屋でしか結果に遭遇できない実験を行えば、教室に行く必要性が出て来ます。文系のクラスでも、《思考実験》は可能なはずなのです。

例えば、《思考実験》の末、米軍の戦闘機やミサイルには、日本製の部品が組み込まれている現実から、集団的自衛権は既に行使されているとは考えられないだろうかという極論を提示してみます。これらのライブ授業における挑発や《思考実験》はひとつひとつ、教員（著者）がス

テージからフロアへ降りて、学生にマイク突きつけて、掛け合いで練り上げてゆきます。結果、学生はRPG（ロールプレイングゲーム）のように反応を演じてくれます。そして、彼ら彼女たちは、一度演じた役を忘れません。ノートを取るより、マイクに反応する“小芝居”をさせることが、教壇からの効率の良い啓発・啓蒙につながるのです。

現代の社会問題は、いずれ歴史が決着をつけるのでしょうか。だから、授業で示した内容や考え方は、必ずしも正解であるかどうかが問題なのではありません。多くが選択肢の一つか、考えるきっかけなのです。学生は家に帰ってから、改めて自分の意見を固めてゆけば良いことなのです。要は、この時間この教室へ来なかったら駆使しなかった脳の部分を賦活させた、つまり、考えた事もなかった社会問題をライブに考えた授業に意義があるのです。

教室に正解はないという意味では、賛否が国論を二分する安保法案に関しても、教員は学生に、教員の考えを強要せず、考え方を説明するのみで終えるスタンスが大切です。それが自由な思想市場としての大学の本分だと、著者は心得ます。大学は、あらゆる考え方の可能性を探究する場であり、ある考えに次世代の若者たちを洗脳する場ではありません。

現代未解決の社会問題に関しては、学生に、考えを強要せず、考え方を説明するのみです。学生は家に帰って、ごはんを食べている時や家族だんらん団欒、また、風呂に入っている時にでも、授業内容を反芻して意見を固めてくれば良いのです。

教育とは地道な革命です。最高学府とは、もはや《知識》を教わる、学ぶ場ではありません。教える側も教わる側も、予習して来て意見を述べられるのは当たり前です。しかし、予習していない事態に遭遇しても対応できるサバイバル能力を体得させるのが、社会に出る前の大学教育だと著者は考えます。

大学とは、不測の事態に際しても、ものを考え脳を捻る《知恵》の道場です。ですから、著者が話して来た事すべてに、学生は同意したり賛同する必要はありません。ライブ教室で行われるのは、正解はないが、一般論や良識に冷や水をぶっかける《異化効果》により、発想の回路を身に着ける思考訓練の授業です。あらゆる社会問題の解決策として著者が提起する試案に対しては、学生から荒唐無稽だと言って反発を食らうこともあります。著者の提案は、一気に革命を起こすつもりで発想では

ありません。施策として、空間的に限定した「特区」や時間的に限定した「社会実験」で試してみる意義がある提案なのだと説明しています。

『メディア論』のライブ授業で取り扱うテーマは、「国際」、「政治」、「経済」、「法律」、「教育」、「社会」、「福祉」、「スポーツ」、「科学技術・メディア」等々、多岐に亘りました。本論では「科学技術・メディア」の分野から、ほんの一例を紹介します。

テーマは、仮想現実の危険性です。

学生からのコールは、ミニレポに「ゴーグル型のVR（仮想現実）端末を使用するゲーム機が発売されましたが、360度視界を支配されてしまったら、いよいよ虚構と現実の境界がわからなくなるのではないのでしょうか?」とありました。

それに、教員（著者）からのレスポンスとして、「新しいメディアが出るたびに、虚構と現実の境界がなくなると危惧されて来ました。古くは、リュミエール兄弟の映画がはじめて上映された時、画面に向かって走って来る列車を本物だと思った観客は逃げ惑いました。しかし現在、リテラシー（読解能力）を体得した観客は、虚構と現実の違いをわきまえています。結局、メディアを挟む以上、いずれ境界が認知出来ることが文明史は明かしてくれています。本当に認知できないのは、化学物質を体内に取り込み、脳が誤作動するケースでしょう。私がアルコール依存症からの離脱症状で見た幻覚は、最後まで現実だとして言い張っていましたから。（『楽天的闘病論』pp.112-113. 参照）つまり、何十時間もゴーグルを外さず没入して、脳の回路が依存症にでもならない限り、通常使用においてゴーグルを外せば、虚構と現実の境界は認知できるはずですよ。」とレクチャーしました。

ここで再考すべきは、「虚構」とは何かという思考回路”でしょう。

そして、このような『メディア論』の授業後に募る「教員へのメッセージ」で、最も嬉しいのは、次の内容です。

「メディアでは聞いたことのない見方や価値観に触れ、自分の考え（哲学）が深まった。」（文化・歴史学科3年）他、同相多数。

これこそが、思想の自由市場を体現できるライブ授業の存在意義であり、教室授業はライブハウスでなければ生き残れない証なのです。

3. 思考実験で表れる異化効果

特にマス・メディアでは計り知れないテーマ探究を、ライヴハウスたる教室においては質疑応答（コール&レスポンス）で《思考実験》して来ました。

そして、常識や良識に冷水をぶっかける《異化効果》を図る授業内容に対しては、必ずしも学生が肯定する必要はありません。この時間、この教室に来なければ考えもしなかった問題を相手にして、頭を捻った事が、大学の授業として意義のある瞬間だったと著者は顧みます。板書もほとんどしなければ、レジメもめったに配らない、フリートーク筋なので、跡には何も残りません。著者の授業準備は、一週間あらゆるテレビのニュース番組にツッコミを入れることです。そして、あらゆるコメンテーターや有識者の一枚上に行く見方・考え方・解決試案を練り上げて、授業で披瀝^{ひれき}できるように準備しておくのです。

テレビ界では、番組の評価を測る基準として視聴率に替わる“視聴熱”という指標が検討されています。これは、当該番組がネット上で論議の的になっているか、具体的にはツイートされた量≡“熱量”として測る指標です。学生が家に帰ってから、家族や友人と授業内容を再び話題にすることは、正に“熱量”を帯びたほかほかのお弁当を持ち帰ったと同相で、ライヴ授業の効用となるでしょう。

この臨場感は、学生の授業準備の段階にも適応します。予習して回答出来るのは当たり前です。著者が予備校生だった1980年代、代々木ゼミナールで受講していた有坂誠人の講座では、予習して解答できるのは当たり前だと、入試同様に即興で問題に答えさせるライヴ授業を行っておられました。突如、降って湧く現代の社会問題も、入試同様に即興で対処する構えを要するはずです。

そして、社会人になる前の学生に、最高学府で必要なのは、サバイバル術を体得することだと著者は考えます。問題を無茶振りされても、正解／不正解に関わらず、大勢の前で、即興で即答する姿勢が、放送大学やネット授業にはない臨場感であり、思考訓練の場としてのライヴ教室の存在意義につながると心得ています。

今日、情報機器の発達で、大学には視聴覚教室が充実しています。し

かし、それは学生の回答にもあった通り、端末を家庭に置き換えられる事を意味して、登校する必要性を失わせてしまいます。

よって、著者は、板書もせずに教室を練り歩き、マイクパフォーマンスだけで、学生たちの《群れ》に^{あいくち}匕首ならぬマイクを突き付ける抜刀術のような授業法で、ライブを演出して参りました。そして、学生が集まり《群れ》を成す臨場感は、ヤル気負けん気を醸成する教室授業の醍醐味です。そこで、お互い刀を抜くように脳を捻って、発言してこそ最高学府における授業の真剣勝負になるのでしょうか。

勘を養う授業こそ、ライブハウスでなければできません。

例えば、常に取り扱い説明書を読んでから、家電を操作するユーザーは、説明書がなければお手上げになり、勘が働きにくいと言われていきます。逆に、常にマニュアルを無視して、勘を働かせて未知の操作に挑むユーザーは、書面や書物がなくても正解にたどり着く暗黙知（≡言語化しにくい勘）が身につくとも言えるでしょう。

白熱教室とラベリングされる授業を展開するサンデルは、授業における自身の対話術をこう語っています。

彼は、講義の不出来を受講している学生の様子で感じ取るというのです。学生が私語などしているのは、講義内容が伝わっていない証左であり、学生が講義内容に没頭している時には、そんな気配すら感じられないと言い切っています。

そしてサンデルは、物音や私語は、学生からの授業内容を改善して欲しい合図だと捉えています。耳を澄ませて、学生からの合図を受信していれば、授業の内容をわかりやすく言い換えたり、話題を変えたりするタイミングがわかるというのです。

さらに、確認するために、アイコンタクトが必要だとも説いています。しかし、これこそ、教員として場数を踏まなければできないコミュニケーションです。著者も新任教員の頃は、極度の緊張を回避するために、教室の学生たちは野菜や果物だと思って、目を合わせることを避けていました。教壇歴20年を超えた現在、ようやく教室の隅々の学生へも視線を投げかけられ、彼ら彼女らの視線もキャッチできます。そして著者と同学年のお笑いコンビ、ダウントウンが東京でブレイクした時、観察者の若手芸人曰く「松本人志は視聴者参加番組で、お客さんの着てはる服までおもしろいからとイジりはるんですよ。普通そんなとこまで眼がい

かないでしょう。」でも、このアイコンタクトこそが、ライブ授業の到達点だと言えるのでしょう。サンデルは、自然科学でも、人文科学でも、社会科学でも、学生と目が合う授業こそがライブ教育の基軸だと説いています。（『サンデル教授の対話術』2011. pp.54-55. 参照）

著者は学部学生の時代から、私語に対して、教壇から「うるさい！」と怒鳴る先生が嫌いでした。怒号は、教室すべての空気を冷ましてしまいます。私語を話していない学生までまとめて怒られる様相を理不尽だとも感じていました。教壇から「うるさい！」は、まるでがんの患部以外にも、広範に照射するしかなかったひと昔前の放射線治療のような被曝です。ですから、私語をピンポイントで鎮める策を持ち合わせていない教員には、失望していました。X線治療は、がん細胞の周辺にある正常な細胞まで痛めて来ましたが、現在、最新の重粒子を照射すれば、ピンポイントでがん細胞を狙えます。

私語の当事者だけを狙い撃ちして黙らせる対策は、ミュージックシーンでも苦労しているようです。ライブハウスオーナーの佐藤ヒロオは、「静かにしてください」と言って会場の空気を冷ますことはしません。ボリュームダウンという手法で演奏の音を下げることにより、私語を際立たせて当事者に気づかせるテクニックを駆使しています。（佐藤ヒロオ『ライブハウスオーナーが教える絶対盛り上がるライブステージング術』p.119. 参照）

そこで現在、教員となった著者は、ライブハウスの更に上に行くテクニックで、私語をピンポイントで狙って撃退しています。それは、ステージ（教壇）からしゃべりながらフロアに降りてゆき、私語をしている学生にマイクを渡すという単純な私語照射法です。

そして、「わたしより、おもしろい話があるんなら、みんなに聞かせてあげてよ。」と語り掛けてマイクを渡せば、大概の私語学生は黙ります。これなら、教室の空気も冷めず、私語をしたら、前田先生がマイクを持ってやってくる！ という抑止力が働き、私語のない教室になるケースが多いのでした。また時として、私語学生の中には、教員たる著者から渡されたマイクで語り始める豪傑がいます。それはそれで、客がステージに上がってマイクを握るライブハウスのようで、新たな熱いライブ授業を展開してくれるのでした。

授業の後は試験ですが、教員の想定を超えるアイデアが並ぶ次世代

の解答を引き出してこそ、ライブハウスたる教室で行う試験を課した意義があると著者は考えます。

研究機関では、努力の量が評価されるとは限らず、報われない実験結果の山です。さらに、学生が社会に出たら、何で評価されるのでしょうか。営業成績など目に見える評価基準で、給料や昇進が決まるとは限りません。決定権を持つ人間の胸三寸で人事が決まることも少なくありません。その場合の対策は、決定権者が誰かを見抜き、その人間が好む傾向、クセに対応することが大切です。努力した分だけ点数で評価されるのは受験勉強で終わり、大学では社会に出てから遭遇する未知の評価に対応するサバイバル術を学んでおいて欲しいものです。

現代以降、《知識》とは、必ずしも脳に集積する必要がなくなります。必要な時に、手元のスマホ等端末から森羅万象の《知識》が集積してあるクラウド（どこからでも引き出せるコンピュータによる情報の格納庫）にアクセスすれば事足りる環境になるでしょう。

ならば現在は、大学入試が《知識》を試す最後の関門と位置付けられるかもしれませんが。しかし、そこでも《知識》の量を測る必要はないでしょう。クラウドに森羅万象の情報が蓄えてあり、いつでもアクセス可能なので。さらに、人間が負けるわけにはいかないAI（人口知能）は、備えていない《知識》も、すべてネットから引き出します。

努力した分だけ、点数に反映される大学入試が人生を決めるような教育制度の国もあり、そこでは受験戦争だと叫ばれています。しかし、《知識》を問うだけの受験ならば、もはや無意味な愚行です。日本では、大学の総定員は希望者数を上回っているのですから、（受験）戦争などしなくとも、皆が勉強しなくても合格する大学へ行けば済む話ではないでしょうか。どんな大学へ行っても、《知識》は、その都度必要な時に、コンピュータで引き出せばよいのですから。

大学入試で最後に試すべきは、受験生に《知識》を集積できる脳の回路が構築できているかだけだと著者は考えます。いくら《知識》はクラウド任せにできたとしても、大学でお勉強から研究活動にシフトするに際し、記憶能力があまりに劣っているのは、クリエイティブな《知恵》を起動させる脳力も保証できないでしょうから。

そして大学は、勉強より研究をするところです。記憶する時間とエネルギーを、考えることに使いましょう。

課題をこなすために書いたレポートは、提出したら忘れてしまうケースが大半です。大学時代に書いたレポート、答案を覚えているひとはごく少数でしょう。ましてや、その内容を人生に活かした記憶などほとんどないはずです。

それならば、授業中に質問されて答えた事の方が、映像として記憶に残ります。そして、そのままの言動を人生に反映できると教員（＝著者）は考えているのです。よって、ハコの小さい研究室サイズの科目では、授業中、秘かに口頭試問を行っています。まさにライヴ試験。とっさに答えられない事は、レポートには書いても、理解していない証拠で、とっさに答えられてこそ、身について日常生活に反映できるのです。

そんな授業ですから、学生から「試験もレポートもないのに、どうやって評価されるのですか？」と質問が来たら、既に授業中に、理解度を測る口頭試問をしているよと種明かしをします。そして、あの質問に、なんと答えた？ と聞くと、鮮やかに映像を蘇らせて答えてくれます。理解して身につけている証拠です。もしも答えられなかったら、もう一度、口頭試問を繰り返して、人生の1ページにします。

理解度と理解力を測るのは、準備された用意周到なレポートや試験より、ライヴ授業中に秘かに行う抜き打ち的な口頭試問だと著者は考えています。

しかし、ハコの大きな教室における講義科目は、どんなにライヴ授業を行っていても、受講者数の多さから、最後には試験で成績評価を下さざるをえないケースが大半です。

ライヴ教室でしか出来ない試験とは、授業で学生がどれだけ《知識》を習得したかを測定するような点数換算ではないはずです。試験中も、学生は創造性を発揮して、採点する間も教員が頭を捻るという、すべての工程で《知恵》を絞られるのが、ライヴ授業ならぬライヴ試験の理想です。そうでなければ、PCの習熟度テストと同相の形態で済み、試験期間中、教員と学生の間丁々発止の《思考実験》が行われて、火花が飛ぶこともありません。

また、昨今、レポートや試験の答案に、ネットに書かれている内容のコピペが多いと嘆かれるケースは、出題方法に工夫が必要でしょう。そもそも、コピペで解答できる出題は、研究機関にふさわしくないと叫んでも仕方ありません。教員が持つ《知識》のなん割を身につけたかを

測る試験など、高校と入試までで十分だと著者は考えます。

折しも本論執筆中にセンター試験があり、眼鏡型端末が問題になりました。見分けがつかなく、試験場で監督官と受験生がトラブルになったり、ウェアブル端末を身につけないようお達しが出たりというニュースが飛び交っています。果ては、どんな端末が売られているのか捕捉しきれないとの監督官からの嘆きが報道されています。（「あすからセンター試験 着用型端末 注意呼びかけ」『読売新聞』2017.1.13.朝刊 34面 参照）

MIT（マサチューセッツ工科大学）が、コンタクトレンズでPC画面を見られる技術を開発している現在。ウェアブル端末どころか、身体と同化したメディアを規制する術は、なくなりつつあります。ならば、メディアの向こう側よりも、こちら側の方が魅力ある授業や試験をするしかありません。コンタクトでカンニングが出来るなら、メディアの向こう側に解のある出題は無意味です。教員と学生が、即興の掛け合いをする思考実験室。それが、大学におけるライブ試験場の生き残る道です。

そして、教員の想定を超えるアイデアが並ぶ、次世代の解答を引き出してこそ、試験をした意義があると著者は考えます。

例えば、実技のために登校する体育大学では、教員の技や記録を下回る結果の学生など、まず居ません。ならば人文科学や社会科学の分野でも、次世代が教員を超えるクリエイティヴな答案を書いてこそ、最高学府における学問の進化が果たされたと言えるでしょう。そして、脳の実技こそが、ライブハウスたる教室授業での鑄^{つば}迫^ぜり合^あい、質疑応答（コール&レスポンス）だったのです。その成果を問う試験もまた、同じモードで測るべきではないでしょうか。

結果、自分で問題を設定し、自分で模範解答を紡ぐ試験を行いました。ですから、模範解答などありません。採点する教員の発想を上回るクリエイティヴィティを期待しているのです。それでこそ、学生が、教員の技や記録を必ず上回る体育大学の教育現場と同相となるのでした。

自分で問題を設定し、自分で模範解答を紡ぐとは、問題発見能力と問題解決能力を測る究極の試験でした。但し、注釈として、「他の学生とひとりでも、かぶった答案は、ドボンで大減点。」とあります。他の解答とかぶったらドボンで大減点というシステムは、答案にオリジナリティが担保でき、カンニングや不用意なコピーを抑止できます。

そして、この様に、教員と学生間の丁々発止の化かし合い、すなわち《知恵》比べが展開されるライヴ試験こそが、コビペの出来ない創造性ある答案を生むのです。

繰り返しますが、化かし合いとは《知恵》比べであり、サバイバル術を研くという適応進化論に則った作法です。そしてそれ即ち、学問の進化に通じると著者は考えています。

現代の産業革命 AI に代替される仕事が、単純労働のみならず、知的労働にも及ぶと想像されています。苦労を重ねて勉強し、最難関の試験を突破した公認会計士の仕事まで、安価に人間より正確なソフトで賄えるというご時世が来るそうです。そして就職難の時代が来るかと思いきや、情報工学の分野では、少子化と合わせて、労働力の需要と供給が丁度バランスよくなると楽観視する研究者もいます。

それは、特に AI による労働の代替が顕著な先進国において、LGBT（レズビアン：女性同性愛者、ゲイ：男性同性愛者、バイセクシャル：両性愛者、トランスジェンダー：性の不一致もしくは超越）という必ずしも（労働力を生む）生殖を前提としない性の権利が認められ増加傾向にある現実も、文化人類学の視点から考えれば当然の帰結なのかもしれません。

著者も、楽天的な未来予測には共鳴して増幅させる政策を考えるようにしていますが、目の前の学生の進路指導は、常にライヴです。

稲増龍夫は、「就活は最強の教育プログラムである」（2014）と喝破しています。人間とは、ただ蟻のようにその場で直面した問題に取り組むだけでなく、第2章でも《思考実験》を試みたように、あらゆる社会問題に対して事前に解決法を練る想像力を有しているのだと言えるでしょう。だからこそ、対策を立てる教育プログラムは有効なのです。

まず、真っ当な就活を望み、それが可能な学生は自分で登山道を歩いてもらうか、キャリアセンター、つまり大学の就職部にナビゲーションを任せます。

しかし、学生の中には登山道を歩けない、歩きたくないアウトサイダーもいるのです。そんなゼミ生には、極論社会学者の著者が、起死回生の獣道を教えるのでした。

では、就職活動において、著者がゼミ生に伝授している《即興》のゲリラ戦術、その一例を挙げてみます。

こんな面接に遭遇してお手上げだったという学生から聴取した難題に、ライブでアドリブの解決策を示した「私なら、こうする。」という就職指導の数々。それらのシミュレーションのほんの一例を、ドキュメントに紹介します。

ワンマン社長の最終面接で、社長が一方的に自社の自慢話を喋りまくり、自己アピールの暇もなかったとうなだれて帰って来た学生のケースです。著者なら、ワンマン社長が絶対にそばに置いておきたいと思う人物像を自己演出します。

ですから、ワンマン社長のしゃべりが止まらないなら、「社長！ そのお話、ノートを取らせて頂いてもよろしいでしょうか。」と切り込むのです。そして許可が下りたら、必死で、ひたすら、社長の話をノートに書き続けます。そして、社長が、ここ一番の会社自慢をはじめた時に、ダメ押しのひと言をはさむのです。「社長！ いまのところ、もう一度お願いします。」

以上のシナリオでリベンジした学生は、ワンマン社長のベンチャー企業に内定しました。

こんなに自分の話を熱心に聞いてノートを取ってくれる若者なら、社長がそばに置いておきたくなるのは火を見るより明らかでしょう。自慢の社史の編纂にも適任です。

ライブが求められる就職指導、その片鱗を紹介しました。

4. 結語

人間コミュニケーションの基本は、音声です。文字は後発のメディアで、口伝^{くでん}、口授^{くじゅ}、口訣^{くけつ}といった感情が伝わりやすいライブ授業こそ、大学が生き残る道だと著者は考えて来ました。そして、昔から、学問や技芸の奥義は、師が弟子に口で伝えて教え授けると申します。

例えば以下の《思考実験》も、唐突にライブ授業で行います。

ゲノム解析で、がんが発症する確率がわかるようになって来ている中、著者が患っていた依存症も、遺伝子レベルで決まっているのではないかと自覚する患者が増えています。

アルコール依存症者が反省と病気を繰り返さない意味を込めて語る“酒害体験”も、実は発症の引き鉄になったに過ぎず、真の病因とは、

遅かれ早かれ発症する運命の遺伝子レベルにあったのではないかと著者は考えはじめています。

学生からは冗談半分で、「心配せんでも、うちらは先生みたいにアル中にはならへんよ!」とコールされ、返す刀で「俺かて、君らの年ごろには、依存症になるなんて思てへんかったわ!」とレスポンスしていますが。

もしも、精神疾患の多くが、遺伝子レベルで決定しているとしたら、精神科医の数だけ診断が違うという不確定性は消え、理解する気のない“世間様”に「ホントに精神病?」と疑われることもなくなります。なりすまし精神病も、ゲノム解析で駆逐できます。

しかし、そのダークサイドには、遺伝子レベルで人間が社会的に差別される問題が出て来ます。例えば、精神病を発症するのが自明の遺伝子だと診断された人間は、就職差別、結婚差別等々、生まれながらに差別され続けるでしょう。

さらに厄介なことは、精神疾患を逆手に取る“悪意”も発現します。

数年前、前田研究室に、責任感があり約束は必ず守る気質の学生がいました。卒業後、ブラック企業に就職してしまった彼は、不当なノルマでも守り続けて守り切り、持病の精神疾患が悪化してしまいました。過度の責任感を有する精神病を患っている人間を、都合のいいアフーマティブ・アクション（障がい者枠）としてブラック企業が雇い入れ、ノルマを課しては病的に守らせて暴利を得るという闇の力が現れるのです。

くだんの教え子は、過労死する前に、精神科医に就労不能の診断書を出してもらい、ブラック企業を辞めさせました。救う手立てもライブでなければ、間に合いません。

このような仮説に近い論考をエビデンスを固める前に語り、被害者を救ってから研究のスタートラインにするのも、思想の自由市場たる大学のあるべき姿でしょう。

そしてライブの重要性は、国際政治の舞台でも顕著に示されます。

条約や国交など国際政治の最重要案件は、どんなに映像の中継技術が進歩して、臨場感溢れるテレビ会議が可能になっていても、最後は生身の首脳会談で決します。正にライブでしか、歴史はつくられないといっても過言ではありません。

極論社会学者の著者は、精神医療も、行き着く果てはAI等、科学技

術の診断に代替してもらわなければならない時期が来ると予測しています。人間では、多くの精神疾患を診断した責任を負いきれないでしょう。そして、センチメンタルにならざるを得ない人間の診断を基準にしている、社会科学の領域にある社会保障は行き果ててしまいます。

しかし、これを詳しく実例を挙げて説明することは、万人の目に触れる書物、つまりマス・コミュニケーションでは誤解を招きやすく難しいでしょう。ですから、第1章で学生からの希望的回答にもあった、限定的な信頼関係のあるコミュニケーション空間、つまりライブ教室において、いまここでしか語れない問題提起をするしかないのです。サンデルのライブ授業『白熱教室』も、誤解を生まないほどのプレステージ（＝権威）を確立するまでは、ハーバード大学の教室（ライブハウス）の中だけの秘儀で、非公開でした。

ライブとは、いまここにしかない一回性の刹那的な出来事です。

そして、記録が残らないと思われるからこそ、あらゆる可能性を探究できるのです。さらに、学生からのニーズにもあった！“熱量”は、ネットライブでは体现できません。授業がライブハウスで行われなければ、学生のニーズには応えられないのです。

ミュージックシーンでは2017年、作品は無料配信して、ライブの動員で収益を上げているChance the Rapperが、第59回グラミー賞の最優秀アルバム賞を受賞しました。

これまで、CD等、記録に残る作品を発表しているアーティストのみが対象であったグラミー賞。それが一期一会のライブ動員を主戦場にしているアーティストに最優秀アルバム賞を贈ったことは、モノ（CD）よりコト（ライブ）へ消費社会の対象が変容している証左であり、ライブ会場に満ちるいまここにしかない《アウラ》という情報の価値観が再評価された歴史的な事実です。

最後に、本論を読んで、これでは授業内容の醍醐味が伝わらないなと思ってもらえれば本望です。そんな読者や学生の皆様が口伝、口コミで、授業はやっぱりライブでなければ生き生きとは伝わらないと証言して下されば、望外の喜びです。そして、あらゆる情報がコピー可能な電子化の波にさらされる中、そんな熱のこもったライブ授業を行うことでしか、いまここに物質として存在する大学は生き残れないと著者は予測しています。

注)

本論は、著者の口頭発表（以下）を叩き台に、大幅に加筆・修正した内容です。

関西社会学会第 67 回大会一般研究報告（2016.5.29. 於：大阪大学）

11. 社会心理・社会意識（2）

演題「即興授業論序説——大学は、ライブでなければ生き残れない——」

前田益尚（近畿大学）

<http://www.ksac.jp/wp-content/uploads/2016/05/7aea20f98fa0ee0c8914f8c22e1f88f1.pdf>

参考文献

有坂誠人『有坂誠人の現代文速解 例の方法』学習研究社、1987.

Benjamin, W., *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*, Abhandlungen, Gesammelte Schriften, Band I -2, Surkamp, 1974. (野村修訳「複製技術時代の芸術作品」多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術」精読』岩波現代文庫、2000.)

Certeau, M.D., *L'Invention du Quotidien 1*, Art de Faire, U.G.E., coll.10/18. 1980. (山田登世子訳『日常の実践のポイエティック』国文社、1987.)

稲増龍夫『就活は最強の教育プログラムである——稲増龍夫&法政大学自主マスコミ講座』中央公論新社、2014.

前田益尚「メディア史の臨界点、テレヴィジョンの映像——マクルーハンを芸術と認知せよ」大越愛子・清真人・山下雅之編『現代文化テクスチュア』見洋書房、2004. pp.131-143.

——『楽天的闘病論——がんとアルコール依存症、転んでもタダでは起きぬ社会学』見洋書房、2016.

McLuhan, M., *Understanding Media: The Extension of Man*, McGraw-Hill Book Company, New York, 1964. (栗原裕・河本仲聖訳『メディア論——人間拡張の諸相』みすず書房、1987.)

Sandel, M.J., *Justice with Michael Sandel and Special Lecture in Tokyo University*. 2010. (NHK「ハーバード白熱教室」制作チーム・小林正弥・杉田晶子訳『ハーバード白熱教室講義録+東大特別授業』(上・下) ハヤカワ・ノンフィクション文庫、2012.

Sandel, M.J. & Kobayashi, M., *The Art of Dialogical Lecture of Michael Sandel*. 2011. (マイケル・サンデル 小林正弥『サンデル教授の対話術』NHK 出版、2011.)

- 佐藤ヒロオ『ライブハウスオーナーが教える絶対盛り上がるライブステージング術』ポット出版、2010.
- 佐藤卓己『テレビ的教養——一億総博知化への系譜』NTT出版、2008.